大分の史跡－元町石仏－

大分元町石仏は通称「岩薬師」とも呼ばれ、地域の人びとに大切に守り継がれています。磨崖仏の宝庫である大分県の中でも屈指の規模と卓越した造像技術を誇り、郷土大分の仏教文化の繁栄を今日まで伝えています。県南の臼杵石仏とならぶ大分を代表する磨崖仏で、昭和９年（1934）に国指定史跡に指定されました。

元町石仏の尊像

大分元町石仏は、上野丘台地の東南端の崖面に彫り出されています。堂内の中央に鎮座する伝薬師如来坐像は像高 307cm を計る丈六仏で、ほとんど丸彫りに近いほど厚く彫り出されています。伝薬師如来坐像の向かって右には毘沙門天とされる天部立像とその脇侍である吉祥天像、善膩師童子像の三尊仏が彫られており、左には不動明王とその脇侍の矜羯羅童子・制多迦童子の不動三尊立像が彫られています。また、堂外の崖面にも数体の摩崖仏が残されています。元町石仏は、伝薬師如来坐像の温和な表情や浅彫りの衣文表現などから、最近の研究では11 世紀後半頃の作と考えられています。

現在の元町付近一帯は、当時「勝津留畠」と呼ばれ、宇佐宮領に組み込まれており、その強大な経済的基盤を背景に造立されたものと考えられています。

大分元町石仏の覆堂

伝薬師如来坐像

元町石仏の中尊－伝薬師如来坐像－

元町石仏の中尊、伝薬師如来坐像の温和な表情や彫りの浅い衣文線などは、大仏師定朝（?-1057年）により確立され、その後全国的に波及し木彫仏造像の規範となったいわゆる「定朝様」の伝統を継承しています。また近年の保存整備にともない、仏像の表面の仕上げに漆の痕跡や塑土を盛りつけている部分が確認されています。これらは主に、木彫仏にほどこされる技法であり、元町石仏は当時の中央の優れた技術を持った木仏師による造像の可能性も指摘されており、大変注目されます。

現世利益の仏
－薬師如来－

薬師如来は、衆生の病苦を除き安楽を与えるとされ、特に天武天皇（？-686 年）が皇后の病気平癒を祈って薬師寺の建立を発願して以降、現世利益の仏として信仰を集め全国的に造像されました。

大分元町石仏周辺